

---

# 寂しがり屋と煙

愚者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

寂しがり屋と煙

### 【Nコード】

N7570E

### 【作者名】

愚者

### 【あらすじ】

真島琴美。それがアタシの名前。都立海空高校2年B組。そこがアタシのクラス。泉箏。アタシが恋した相手。彼はアタシと同じ年のクセに寂しがり屋で、彼はアタシと同じ年のクセに煙草を吸って、アタシは彼のことが好き。彼はどうかなのかは知らない。ただ寂しいのが無くせばそれでいいのかもしれない。アタシである必要なんてないのかもしれない。でも、今は、このまま彼と過ごせばそれでいい。

# 1

真島 琴美。

それがアタシの名前。

都立海空高校 2年B組。

そこがアタシのクラス。

泉 箏。

アタシが恋した相手。

彼はアタシと同じ年のクセに寂しがり屋で、

彼はアタシと同じ年のクセに煙草を吸ってて、

アタシは彼のが好き。

彼はどうなのかは知らない。

ただ寂しいのが無くせればそれでいいのかもしれない。

アタシである必要なんてないのかもしれない。

でも、今は、このまま彼と過すごせればそれでいい。

「ねえ、煙たいんだけど」

アタシが換気扇を付けながら言う。

「ああ、そうだな」

彼は自分の椅子で煙をゆつくりと吐きながら言う。

「はぁ・・・この煙の何処がいいのか、アタシには分からんよ」

アタシがいるのは彼の部屋。

彼は一人暮らし。

ここにアタシがいる理由は彼の彼女だから・・・でもいいけど。

本当は彼の宿題をアタシが写してる。

彼は不良だが、頭と体はいい。

頭がいい理由は分からないけど、体は週何度かある肉体労働の報酬だ。

「眠い」

「だからって、アタシの背中に抱きつく理由が分からないんだけど？ 幼児プレイ？」

「黙れ、寒いんだよ」

「布団被ってなさいよ」

「騒ぐな。やっぱ騒げ、体温が上がって暖かい」

ついに彼は背中に顔をすりつける。

「や、止めなさいっ！」

たまらなくなつてアタシは彼を両手を使って引き剥がす。

「うわっ、寒っ！」

彼はアタシの左手を右手で、右手を左手でどかして胸に抱きつく。

「暖かい・・・zzz」

アタシが恥ずかしくなつて顔を赤くしてる間に彼は顔を胸に付けて寝てしまう。

「・・・え？ ちよつと？」

アタシは座ってる。

彼はアタシに抱きつく状態で寝てる。

「宿題が・・・それに動けないからトイレとか・・・帰れないのは平気だけど・・・」

「zzz」

「はぁ・・・明日の朝だな」

アタシは彼の背を撫でながら思う。

「寒いわけないでしょ、くっ付きたいならそういいなさいな」

今は7月、冷房を付けていたけど、今は切つてある。

「zzz」

「馬鹿ね、莫迦のほうが合ってるかもしれないけど」

アタシは言葉では彼並には出来る。

そのまま、アタシは彼に重なるように眠った。

## #2

コチコチコチコチ……

部屋に時計の音が響く。

アタシはまだ暗い部屋で目を覚ます。

「うわぁ、3時かぁ……」

時計の次に下を見ると

「寝てれば可愛いのに」

寝顔をさらけ出す青年が一人。

少しだけ日に焼けてて、顔つきは男前。

なんでアタシなんかが彼女になれたのか分からない。

「水飲みたい……」

呟いて、彼を下ろそうとすると

「んー……」

え……

彼の抱きつく力が少し強くなる。

「ちよつと？」

彼をゆすつても

「くうー……」

寝息は本物だ。

「困ったわね、動けないわ」

その後何度か抵抗したけど、彼は離さない。

「はぁ……」

ため息一つ。

彼が私を離さない理由は一つ。

「……寂しいんだよ」

前に問い詰めたことがあった。

その時彼はそっぽを向きながらそういつて、頭をがしがしとかいていた。

「ほんとに、馬鹿」

なんでか顔の赤い自分が恥ずかしくなって、彼の背中に顔を隠すようにまた、夢に墜ちる。

「おい、起きろ」

なんか、あたしの体が揺らされてる。

「7時半だぞ、おい」

彼は少し焦ってる、いいじゃん。まだ間に合うよ。

「クソッ、怒るなよっ」

彼の声の後に衣擦れの音。

気になって目を開ければアタシの服を脱がす彼。

「何してんの？」

意識が急速的に覚めるのを感じながら聞く。

「お前がこぼしたジューズの処理」

服を見せながらいう彼。

確かに背中にオレンジの染み。

「・・・あ」

ほっとする、別に困らないけど、寝てる間に襲われるのは嫌だったから。

「襲う時は起こすし、第一襲う気すらない」

「えっ？ってか、襲う気ないって酷くない？」

ムカついたから彼に抱きついて胸を当てる。

「襲ったら嫌だろ」

彼がアタシをものともせず服を洗濯機に運ぶ中言う。

「何が」

「なんか、そのために付き合ってたみたいでヤダ」

「違うの？」

「ちげーよ」

「じゃあ、何で？」

あたしは彼のことを考えずにニヤニヤしながら聞く。

「その内分かるんじゃないのッ」

彼はアタシの襟を掴んでベッドに落とす。

「むう、教えなさいよー」

隠されるのはやだから、彼の服のすそを掴む。

「その内、な」

無理やり足を動かしてキッチンに行く。

きつと朝食を作ってくれる。

彼は意地悪だけど、優しいから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7570e/>

---

寂しがり屋と煙

2010年10月8日22時04分発行